

203
7
1

武江年表

卷一

武江年表



江戸書鋪

青藜閣

武江年表序



龍泉大阿之塞。如豐城也。蔚紫之末。騰誇斗牛之間。其威靈如此。而終出於石函。且雌雄似。疑以。何頭。悔。其。聊。在哉。隆然。其。至。復。其。匹於延平之津。則。其。我。可。為。知。

武江年表序

美其寔。一可益見矣。由是觀之。嚮
似可怪者。即足泉阿之威
靈。取以傳于萬古。而不磨滅。而
顯晦之取。關係有案。大矣。豈翅
象。何凡物之有。匹自有其
數存焉。何悉受生失得哉。
友人齋藤月峯。新職之始。

著書者。其千種。既行于世。今
茲又著武江年表八卷。分
為雌雄。先取其雄。四卷。持
之。其為書也。自慶元。韓韃
迄于今日。去之。天災地妖。坊
街之沿革。世態之遷流。物
之權輿。事之興廢。小之少。

人之生率神佛之啓合龍及
風語似談珠玩戲具。經羅
不遺。攬捩尤効。凡二百年未
之事。該一泄一來。隨求隨
存。族老。受其易終。而更無
繼。豈無繼哉。事勢殊掌。操
觚不苟。退待來日耳。其至

如象阿復匹。至鱗。捲沙彩
光射波。見生美。可全見矣。
其功可念。知矣。契別此編
之。雖鳴以待來日者。亦取以
地。雌雄相匹。傳于。第古而
不朽也。與。其何憂之。須
日。剗剗。發。先卜吉。仍舊

貫乞為年名不敢辭便題
蓋辭以為延平前為年
系永二年屠維心星三月
上澣

前山陣人源瑜



七十若戰驅觀鯨紙扇籃
輿教太平宮朝貽孫謀臣列
國日光高照海東城
試神劍罷并收權二百年
間不動兵官家今日真無

事象震高歌唱太平

四月十七日作二首

右二絶句若文化乙亥夏

日光宗廟弗忘之辰鵬齋之龜田翁

之作予親筆取以贈先考也々取

以弁於卷之首云

月岑誌

提要

○慶元より巨降昇平の化光世尔被り穀下の甚思日小陪せり此故小

遊陌僻境の人とりとも干望を遠しやせ其は厥佳廉を着願廣大と

作くともく郷土父祖の名所固會ありて彼親の舞と一次に余ら

歳事祀を編して示導引とい再此輯をあら村澤聖壇のあり

東武極之華の梗葉を知りてむるの一助とい

○此編并載所の中人以下の身目小解るととる中々地理の沿革

或は坊間の風俗事物乃権要尔至るまで獲る不随く遠く遠く

公迎乃濟事の例ひ知るべしあつたため傳單せる事も採り

あつたり漏せり

○是れ元以来新地を撰りて是決彦列臣の舊邸地を阻く而く不播

寺社氏屋も地を編るる新小割一或は昔彼の雲小羅りて廣を

異小するの類考ておあへりて以て起し見算ふ者さうひて一二を

記 類細の事ありし編せり

○忠臣孝士貞婦烈女の勲忠賞を賜りしもの枚数す小違ありし
姑々斯編小版せり

○新古墨客は蕪之の作其代有名の紫温平の年月地の書小貞えら
形をりて一二を添す貴人ら子に傳りて多々漏れぬ近世永決の傳

もまろ遺漏ありし一九世編小編より久池永釣の法も人物志者押東より同書編
老權好々墨河一覽古墨客の思ひより日本の書をかき知りし

○古武の人著以所の新編の書は牛小汗一捺り充へくく種く記し

る以る長小ありしさまも久小の江戸の事跡名所等小ありしもの一二を
撰りて水編上小の年序をよめる

○此世の風俗を知りし人ありし書も貞女年表おちがま庶務集事海客等よりし
首く抄録塵塚浪濤海之話一書我衣織の続環海たづなうみ青抄浪城遊笑覽

陽の系書骨書重々集事の冊子ありし書小所々を要を撰りて記せしこと
○文化中編輯せる大江戸あかひ是秋と題せるは年一巻あり他共
ふ詳大凡斯編の粹

裁小肖りてはまき裁り所事一ゆりて完結の物語りえは余の撰

も又廉編より一書中歩百歩の歳りをもまきし并波書小の童編信証乃

教述裁りし中本も伝りし抄りをもりて要とされと巻帳治極ありし人
事を感ひてありし者けり

○余固より浅草跡見かておろくは杜撰ありしアはまき天抄書を参考し

歳若の吟定を添て精微を尽んせし裁評の事を應りて今存地の類あり

へりし事書を願りて書房の求るふは書を草稿の浪庸書小案制剛小地
しと梨事小寿以庶幾大方の君子遺腹を補ひ誤誤を正しありし事を

是れ永新元成申霜月吉且

土都神田散人
永新元成申霜月吉且



附言

東都^{まがら}市井^{しやう}の^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 小^この^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 據^よる^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 詳^{しやう}載^{ざい}傳^{でん}信^{しん}の^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 此^{こゝ}編^{へん}全^{ぜん}部^ぶ、冊^{さく}の^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 詳^{しやう}載^{ざい}傳^{でん}信^{しん}の^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}初^{はつ}め^め四^し冊^{さく}の^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

乙酉夏冬

書肆 者 藤 岡 祐



武江年表卷之三

天正十八年庚寅

今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

 今^{いま}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}一^{いち}日^{にち}、^{こと}事^{こと}業^{ごう}の^{こと}始^{はじめ}ま^まる^る旬^{しゆん}日^{にち}の^{こと}間^まに^{こと}事^{こと}に^{こと}り^り

御入國の後日尔河津の鹽を江戸運送の爲波地より船の通法を

増しぬるは是今の高橋の通ありといひ

○八月平河天満宮 津城内梅林坂より 津城の北平河原に移さる

○夏津勢の多市よりくる共磯瓶橋の辺

風呂鏡永樂一歳あり皆人珍しく

○四嶋山廣徳寺 小田原より今年小原家滅亡の後

来り今の昌年橋の沼地を軍庫を営む

○天正の頃軍兵乱波風間といひ

忍び入て盜を多し徳人色々

絶く

天正十九年 辛卯 正月間

正月冥八洲の徳家某首の御堂と

○十一月軍兵諸社小津寄附願の御朱印を

○十二月軍八州通用の

○小田原の靈鳳山種徳寺今年

文禄元年壬辰 十二月八日改元

津城の西北の地大法善組宛宅地を

六書まての

○田島山折頼寺天正十八年小田原より

本館町の地小寺院を

波地の高農も

一其の子あり

友誼を以て廓をひらけり尚え和の件小あるせり又小田原の商家増田を以て
友嘉明人小又靈香といふ服茶の方を授けりしが小田原を以て後江戸小あ
か町甲丁同小住りて彼茶と佳し小大小路
ありてはるる今人死人の家より製せり

文禄二年癸巳 九月間

天正十八年の後島川へ寺地をゆくり一日照山法師尾山英卷今年
道三河邊へ移今所上人

○惺齋先生叔敏始て江戸へ移旅寓の室
我有と云 台命を傳へる貞觀政要を讀まし一困暇四景我有解のふを
撰りて東洋の遊遊と云 且素とら士家武時陽田流波を云と文ははせ文集小
見えたりと云れり思は惺齋和昇集本よりと云る時

たうあさもうくやと歌をゆくりゆりむ秋の月の東海の共く

○天正の頃常陸國江戸崎ゆり小田原へ移る法皇一羽と云兵法の名人

あり土子泥舟小田原小田原根岸菟角と云て名を得る女子二人あり

此是病の時菟角の病人を見換て逐電ちてん江戸へ来て微塵流と

名付一派を起して男子多く随へ上見ぬ勢の勢ひを以て一羽を
三年と云病死しり友人の男子菟角が事を出して孫橋りあ
人の内江戸へゆりて菟角を討てうら後き一寇ムトをとりて小田原ゆり
うの小田原江戸へ報く泥舟の困小止り麻島の社小菟角相伝を祈る
小田原江戸ゆりて文禄二年九月十五日日本橋より菟角小田原へ
より官府より此事を以て刀根岸を預り木刀の仕合をゆり
しり友人木刀を持て去合りる菟角お願ふと云は切りて逐電して
行方を知しい以上中書代記のふを思は中尾菴の編の菟角小田原を
八幡宮の額小菟角と名書しり家ありし記せり今人死は

同三年甲午

九月千坂大橋を始て掛く此地の誌も同本橋掛現別島田院の記録も
俣奈佐おちあはせを奉行中流急流ありて

橋板とありりあり橋板倒して船を斃し一船中の人あり漂ふ俣奈佐現掛現小

新のて渡統
まことのみ
○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年苗地小振させしれ今の辨治橋の苗
も院をぬくる後年神田柳系の辺へ移り又後年へ移る

文禄二年乙未

武蔵小別藏 光次と書書以武蔵と
波河をわけて造る ○小田系苗知山本誓と江戸小振

ひび日比谷橋所町の辺に地をぬくる後年喰町の辺へ移り天和二年

の後の地へ移る ○芝長貝渡集之舟町と日市のあひふちひ

さた橋只一ツあり是ハ渡の橋あり文禄二年夏のまろけ橋のり

あとの残靴を始末を水車跡うちまひてありし

官府へさしあつりまろけ橋を残靴橋といふとありまろけの船町

兼日市町ハ今の残りぬ橋のあつりふまろけあるへ

慶長元年丙申 七月間 十月二十七日改元

一歩系小別金始て通用 芝長令 ○六月十二日系原家内算東法皇大

靈又水毛降 名長升
日五寸 ○閏七月朝鮮人乗艘 ○同十二日大地震月と遊る

止に ○波河墓を窺る ○多田宗玄といふ人靈告をさかりて系部

東山の辺より茶師像を拵りし 幸在る安ん今多田の茶師あり

○税町常仙と冠基宮茶師を安ん

同二年丁酉

邪田不老山感應寺宗刹 冠山日感上人あり世に地不降成七年
ちを建つ今昔中子立邪田感應寺といふ

同三年戊戌

松平為後と駿州より江戸波河墓の下へ移る 後寛永十八年
今今の波河へ移る

○八月三縁山増上寺日比谷より今の地へうつる まろけのあひふちひ
のあひふちひ

岩町の方ありしとこの田をひや町とりするむら湖入の地ふして漁人海中木枝舟の竹を垂て置く魚の入口をひやく九つとせしむるなり今も海苔をよるふしにき用ふひやくをきをかひの住居の地あるひやくや丁とりなり後世はふらうのきをひやくや町と号しける後り其口とありしむら町跡たり町もいふは海苔のきととも

○後世泉養寺宗創 ○十月令鳳山高林と後河基ふたつ宗創あり後年約也と名お店へ移る

慶長己年己亥 二月四日

二月令別山龍室寺天 神田豊尔宗創 寛永十二年

其宗より寛永ふりて別山宗創のより後河基ふたつ宗創ありしとともと撰ひしと一と二を徳一との附ありふたつなり

同又年庚子

小判小光次と豊書せしを極中こくちゅうに改し 光次の徳宗の名あり ○六郷掃再撰もうせん

○始て系於小徳司代を重る ○池上本門寺大塔建立 翌年ふりう 全く成地を

同六年辛丑 十一月四日

八月大小分判挺銀たいぎんの形制を定めぬ 後河江戸判招といふ 大急銀も此時より廢る

○貞観政要板流 孔子家語武經七書板行せしめぬ 清治世以来の刻本

○安南始て奉書寛永九年まへて通治石絶東浦塞始て奉書寛永永

己年の后絶つるふら呂宋始て奉書長十八年迄今年より寛永十

まへて二十三年の乃済舟平船とて我まへて商人亞馬港ノヒスハニ選撰安

南呂宋木の國へ小年毎ふ行て六高賣一紙なりしと云ふ

本年く不絶とあり 以上茶度報 後而載

○十月十六日大地震房総の山を崩し海を埋立と波又海上俄り潮

引さす二十餘町干涸と成る十七日潮大山の如く巻上流死絶し

○十一月二日己の刻後河町事々豊原より火をかひ此大焼亡不江戸町

一字も跡なく人多く死す早亮町中系尊友火事絶はし序ふ始

板葺尔亦以てむより 官制より命せしむるは六町中とてくむ板

葺亦亦不尔脱山弥次を請といふ若人亦秀て家を焼くんとすこ

海道表柱とてり半分凡て葺後半分を六村とて葺うり皆人少は

りり本町二丁目の勝山弥次を請て家を半分凡て葺うり皆人も

略くくや奇特ゆ人あつびく異名を半凡弥次を請といふ是に戸

凡葺の始あり 以上等々也
不復集也

慶長七年壬辰

古泥治へ奉書慶長十一年と 兼唐報
後不也

○小石川益量山来經古河菩提寺と成修通院と号し殿堂汚坊未済建

意あり 志え 築家をあふ

同八年癸卯

今年江戸町刻を命しり まろく 長見は某小日本六十餘州の人志と

よせ神田の山を崩さ 今今
東南あり 南の入海に方二十餘町埋さむを

を直させあふ 是まで大石小石の辺八代海河原及之河原のを鞠町の辺も町を
連りてありしと云 城の辺むしり六代田宝田齊田益満未の

村あり南傳了町小傳了町八代田村の内あり大傳了町と宝田村のうもありしとを

六代田宝田とも今今の村のは大石の辺あり人とりり後田村の南石町後田の辺は橋田

村今今の橋田庄つゝの辺ありしと 市橋法造堂の時今の地へ移させしと云しり後田の

を古くは打入の時ありしと云し 神也入りしと云す一ツ東の町を小ありしと云す十九年の

るまありしと云す古紀小見えたり之河町に江戸法打入の初之河をより小石人を直せば不

不強岩の地を築き居たりしと云す一と云す古名を居たりしと云す一と云す一と云す一と云す一と云す

せしと云す後小町を改りしと云す一と云す古名を居たりしと云す一と云す一と云す一と云す

を直の直ありしと云す一と云す後小町を改りしと云す一と云す古名を居たりしと云す一と云す一と云す

河城地度がりの一々の谷代地をぬりて 河城のうらうらな後再び習地をぬりて河城の西

うらうらあり妻一敷のり古記より元々うらうらあり

河城集云町と普徳の後の只今の日本橋筋より乃之河原をり河原をり河原をり河原をり

河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり

河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり

河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり

河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり

河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり

河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり河原をり

橋とよひぬる事希代不思儀とゆはせりと云く

○夏の頃

台命ありて九月廿愛宕権現社勅請きつららる

○二月廿五額と澹橋河建立

○河田山情隨意院河田

意小系剣

慶長九年甲辰

八月四

二月日本橋をりて定めし東海道及越後陸奥等の街道一里塚

を築めりて二十六丁まで里の標りあり

○永樂銭の代り小廻り又をあらう用ふ

○又臺山源堂と湯治小系剣

同十年乙巳

増上寺の老翁を愛を感して和尙小若く翌日伽藍堂構の

台命を下しぬる事希代不思儀とゆはせりと云く

此時由遠方きうりふより一書一書 車海金考云此本堂の熱板模の由を以て送るが本堂の事なりては此の如し

○大藏清普徳子付栞町のる揚清用比ありまの辺の遊女屋とも元誓預ち前へらつる○此時代述く不道橋ありあり武家藩邸後終多

○南響とりの夕バゴ蕃林を渡り長崎より橋を切らしてめて夕バゴを載る

一夜天心中雲人
持海ももりよ

享和十一年 丙午

大城を築たぬふ二月より始り九月迄然あり
大府如後紀後上流に紀後より大なるを載るり其浦よりひうり

自ら吳橋のかましく者改選置一清書異物とも揚る波水の後もたす

のほろたる商船のちえんは城兼田彈一清書とす
以上京産報後小あり京産云田源とす
國名不詳り一六番丹のありまうとす

○六十六州行実を結て括る○本は昌清と三河橋新設河を差とる後

ぬふ○十二月八日永樂錢法停止誣とるり用ふへき旨日本橋へこれを

享和十三年
とむりよ

小乗氏康の時実在して永樂錢を用ふへと令せられびて幾の上方より天下統一統となり二錢宛更て用ふあるととも永樂一錢のり小びに尺錢を賣てきよ是小ゆわて皆悉をえらひひ万民安らうけとて今年永樂を止めひ一申小乗氏代記ありり或記云永樂一貫又合をよむるめ合ふりり此の百錢小一錢を除去して尺錢と尺合ぬあり小永樂の年貢あるは送風ありびて百錢小尾を後永樂小一せんを價を除く九十六錢をりて通用ととり

同十二年 丁未 二月間

二月十三日より十六日まで 清城の邊より親世金春勅進能具行あり

同廿日同前よりあまの雲の神子お國勅進奇舞妓真行あり

り人の娘と云くおふりよき
○廻系徳州へ弘まるとし下をを新し
後八を新し

養て火を吹をけかりを吸ひを後ひきせを利ひて後小法せひきせの製をの法を利ひて或の作のラウを用ふ又文をきりのを中取ありをく遊りせるもらんえり

○迎清園白伝平公清平向ありは時橋若を本母と改めひ歌をあら

わいせらおいてこ一娘をとりあつてし事とまきり

東の國より舟にわたしの玉乃江戸の川とひらきの南田川あり

○閏七月朝鮮信使初來聘 正使長結吉副使 慶應元年丁卯夏 ○八月八日客星現於

慶長十二年戊申

林道春先生清儒若小命世の世時と先生後世にあり

同十一年 己酉

二月に日月の容方ありて現る 皇年代畧小方形 月出満没如晝

○二月島津侯琉球を征して坤山を尚寧を將ひ來り

○八月阿蘇院始々入貢奉書 唐船始々來

○相草所創林 一説元和元年ともいふ ○秋品川海防初為山際より海防まで二十

里附乃邊幅を度けりて河邊自往をなさしめり

同十六年 庚戌 二月 閏

芝愛宕権現本社辨敷園門石階未法建立 田福寺もこの時建立と元和二年の丙辰紀行小治のつらの祠ありとあり

○銀町不知足院御建立 後持院の 旧名あり

○七月十九日勅して坊上寺十二世貞蓮社源末上人普光親智大師の

居りてあり ○八月琉球始々後府并江戸 泮城へ入貢を尚寧末聘

○官醫吉田宗駒卒 其子宗達又良医のゆゑあり大橋宗柱も宗駒の男あり其書國式二巻を著し

同十六年 辛亥

正月二日晝に蒲生彦彦藩火火門外仙人羅漢の彫物ありて其羅

ありしは時焼くるとして ○琉球聘使來 ○京中外耶蘇宗再葬

○龍徳山雲光院跡茶屋建立 三谷町の 後あり ○六月廿四日加藤肥後清四郎

○官醫養安院正理卒 四十七才を著し身山城守の人とあり曲直原及この門人ありて昨の禮を冒を著し十年江戸に居りて官医也

あり後條を嫡子に傳へて別在に居る

慶長十七年壬子 十月國

亞馬遜引重あまのつりしげより秦書しんしよ之新序しんしよ西把孫せいそん亞始あし之秦書しんしよの事
○七月廿日大教降おほなつとみ○大老造おほなつとみ生傳なまのつとみ承同なまのつとみ於謀まことせしむ

同十八年癸丑

漢文刺かんぶんさし亞始あし之秦書しんしよ○七月七日非田なほ北きた王わう南なん信しん所しよ始し之新しん儀ぎ也
○九月千葉家ちをけのちか後嗣ごてい國くに公こう元げん無む傳つとみ心しん孫そん之の先せん祖そ在ざい何なに乃なほ捨すて相あひ也
○十二月耶や極ごく宗そう之老らう儀ぎ深ふか乎や之の謀まことせしむ
○德とく隆りゆう尚しやう濟せい甚じん因いん國くに而を小せう傳つとみせしむ
○八月十二日はつにじふににち大おほ老らう儀ぎ深ふか乎や之の謀まことせしむ

同十九年甲寅

郡波道圓のりなみちま路ろ路ろ高たか父ちち本ほん隨ずい之の始し也なり
○八月廿八日はつにじふはちににち東とう刻こく大おほ風ふう塔たつ上じやう寺じ山さん之の始し也なり
○九月廿九日くわにじふくににち東とう刻こく大おほ風ふう塔たつ上じやう寺じ山さん之の始し也なり
○十月廿九日じゆにじふくににち東とう刻こく大おほ風ふう塔たつ上じやう寺じ山さん之の始し也なり
○十一月廿九日じゆにじふくににち東とう刻こく大おほ風ふう塔たつ上じやう寺じ山さん之の始し也なり
○十二月廿九日じゆにじふくににち東とう刻こく大おほ風ふう塔たつ上じやう寺じ山さん之の始し也なり

山年問記事 各本を不疑の元重事考を長谷部を抄録也

定町川流... 河津の...
 流之川... 河津...
 山王権現の...
 定町... 河津...
 中畧 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...

井の水... 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...
 河津...

新編萬葉集卷之十一
 書載万部之...
 ○好古曰...
 編...
 新...
 事...
 ○...
 久和...
 考...
 考...

新編萬葉集卷之十一
 書載万部之...
 ○好古曰...
 編...
 新...
 事...
 ○...
 久和...
 考...
 考...

元和四年戊午 二月四日

二月庚寅今の澄海郡の 佛堂佛堂立あり

○所城の辺より火火標田近焼爰○十月寅の刻長雲が慧星が

○月白岳勅堂佛再建十一面觀世音を安んて東岳山に奉り

あらしむ 中真山秀 兼修心あり

同 己未

夏より冬ふりて一夜白氣東南ふり身の南の如く長教十丈又
慧星東南ふりて火とこの如く

○又月より八月まで大旱又穀也く人をも多く死ん

○大坂佛堂書始 ○長谷川書家と云の為久保八幡天境内より

胎の鐘系刻後延室中甚切也く福る ○九月十二日得寓先せん年

九十九大門口人林逢春先せんりも又たりの名波及田塔正意
麦系得菴松永周之ニ宅齊 齊よりこの世ふは

同 庚申 十二月四日

後夜山普門院陽田川の辺より無戸村に移る ○二月十日後夜

光り率 九十二才 ○十一月二日佛と中真親智團作入寂 七十七歳

○廣島佛堂始く建 ○日本境を築せしむる 其除のむ小築せしむる

此の佛堂か来り友小老ら名つらるる或ハ
日教六十路日よておすく友とも云て詳なり

同 辛酉

二月親世おま一代能具行を廣新東洋

○九月廿二日小塔遠州度と宗親長と所友をこのの族と称す

川の中より酒舟茶ふと送る色く

為り来んとちたるもわく一人をさくめを世のさくめを

○十二月十二日鐵田有樂齋年

七十方居居の町をえび野町と云
今ふあり有馬家恒居あり一丸之

元和八年壬戌

活所遺稿 壬戌元日遇靈

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春 諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に昇る法下向あり正紀行を定ま東海道記とあり

十一月十六日

いづれをいふ

いづれをいふありありいづれをいふありありいづれをいふありあり

いづれをいふありありいづれをいふありありいづれをいふありあり

同九年癸亥 八月岡

正月明の復遠澤郡就邑徐勳漢系より小觀を名その二字をききし

歌を揚る○正月又日智彦白道情隨意上人寂七十にやと入世の始を
の身持あり他人をみま

虫の名号を尋ぐて更らるる芝居を年中
社田の地は清浄を流剣を標林と識り ○芝居とて山門浄再建

○十一月十六日幕作奉因坊日海寂六十にや身持と号し
一書り八月あり

世年間記事

女奇形妓を捕せしれ男奇形妓とあり女奇形とあり女道女あり持とてを
持とて和向とあり男奇形とあり

○奉祈一月より葛西まで船道して一二三に又の標を掛

海沿せしめあり元和より寛永の始の事ありといひ葛西
集り

寛永元年甲子 二月晦日改元

伴勢伴難定より長官おに市奴太神をい戸日本橋通平伝

おのふ同十年ふあり人の地奉祈可せん
代地 延慶あり

○長徳法中靈愛を感し永代島八幡宮を勅法を同八年再

○耶蘇宗再獲 ○九月上野小

神祖濟宮清建立

高野山にありは建立のついでに武江に東叡山の
神祖濟宮清建立

○十月吉原又町のあぐ令へ善法藏

今又町を善法藏のすまひあり

○武江志料を記すに實永二年十二月十日鳥丸大納言
の御書ありしに吉原を記すに善法藏のすまひありしに
始りしに今又町を善法藏のすまひありしに

○武江志料を記すに實永二年十二月十日鳥丸大納言

光彦は世中向の序に戸田町を記すに吉原の古墳

ありしを因りて吉原の後勅勅の儀ありしに吉原の古墳

事を書き聞ゆりて同二年十二月九日勅免ありしに吉原の社内子

まつりけること云々 ありしに吉原の社内子

社内子ありしに吉原

寛永二年 丁卯

三月源通村に清下向あり

清下向ありしに吉原

聖書の多し一に記すに武江の由りしに吉原の社内子

○東叡山に生門常沙法花堂

二ツを 經堂と云々 常沙法花堂

○八月八日芝愛宕山権現社火

災後再 法造堂あり

○八月法花

○大地震 ○十一月塔伽沙古末

使の名を 理伽ト云

○新羅より琉球へ渡りしに吉原

の神薩州へ始りしに吉原

ありしに吉原の社内子

同又年代 辰

正月二日系統紀傳を記すに吉原の社内子

河系弘法大師の示現を記すに吉原の社内子

名号を書しに吉原の社内子

けころ民名の担弁小

江戸味噌を二まのすりてひまのりみそとまのりのり月

○今年より武家よりけ書をさる場もよ於てけ斬あり一取を

寛永七年 庚午

正月八日隅田川あて

古塚の志々一社柳のあつりきさくもむ青くも 指映た佐

○二月十日日醫師甲斐進奉奉率 ひのくろんもつら 百十七やりのり色のあて後り一や件 貞武彦のちをさるあつりけりうひの

徳平一後十六歳とああるきりふ とろ若草連の医書を柳花をさる ○二月小溪進生寺あり一布引祖師

像外込事書さうらひ ○二月二日身延久遠寺日蓮池と奉門書

日樹宗瑞日樹信及飯田不配流 ○六月琉球人來碇

○同廿二日大地震毛降 ○八月山王社法造堂

○魚籃觀世喜之田の地不安重以 山法雲上人を奉のま 勢(きり)る西とりふ

○十二月廿二日大地震成刻光為飛行一々事とさまづり

同八年 辛未 十月國

三月十九日江戸沖不灰降 ○同廿日法皇其露降

○二月二日淡茶毛雪上 ○去年より今年も六十尺皮癩癩を病

む共々一 ○東叡山小大佛像 丈六 蘇造 造立あり 揚基廣泥を蘇くそちのせし こそを造くしあらし後年地を

不願測して碑を後 方治の江洞遠小あり 清水親善中堂建 ○八月大風家屋を壊ち樹木

を折る ○十月灰降 ○十月十二日後後氏又代進奉奉率 八十

○十月十七日上野大石焼落立 依る大橋亮務之と 彫りま一丈八尺余

同九年 壬申

諸家深秘録云今年より奥羽仙臺の米穀始多江戸(江戸)今
江戸戸之云云六奥羽米のほかりを江戸令てあふ七名江戸道あり

○平塚明神社御遊立秋祭至りて減乾次

○尚年より山王法皇御禮納り大宮御禮と成り

○室林山善喜寺に頼町代地より宮谷へ移り

○七月琉球人來聘 正徳作敷子合武王 ○村山又二所世之居尊在町子

○八月八日或る夏の法衣の室 市村羽左馬 あり 系二系とある おきんの 由方云

○八月十日或る夏の法衣の室 市村羽左馬 あり 系二系とある おきんの 由方云

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震を未刻又地震あり ○後府由古二番始り

○春鳥丸大納言光彦 ちゅうひやう 信濃前より中へ向ありて

又源通村より中へ向あり

春あけぬめの葉もろろむさし時 未だそりろろ春の意なり

○安宅丸の御船修置より来り 一 既小寛永十一年とも云 柳川町の辺に船を修置しし一年大風ある所預切して修置せり

○二月天台院家より并津合より後河原へ

渡草へ移り ○二月朝鮮人來聘 和田倉山門の内へ移り 少く韓人曲ををせり

○六月十三日大風遠呂豆舟渡海の船八百艘被損

○七月天毒くくく焼 ○ころ痛め来り宗刻五智如来を安直に

○八月茅切町草席如来安直

○八月廿日將時山樂光形年 七十七 ○塚町天中一より藤麻を

詳前... 稀あり

○十二月朝鮮人來聘

正使白藤任統副使東濱令世謙
從事青丘英床 張服亦持古之



武江年表卷之一 畢

